

館長だより 第10号(令和7年10月4日)

ようやく秋の到来です

日差しはまだ厳しいものの、行き渡る風の匂いにはほんのりと季節の移ろいを感じられるようになりました。風土記の丘の木々も色づきを始め、日ごとに少しずつその色合いを濃くしています。

先日風土記の丘の尾根道を歩いていて、ちょっと違うにおいがたちこめていると思ったら、2メートルほど先の笹藪の傍に白い大きなキノコが傘を広げていました。ドクツルタケ(毒)に似ているなと思いましたが、ひとつに気が付くと次々にキノコが目に入ってきます。キノコには有毒のものも多く、取り扱いには注意が必要ですが、そんなところにも夏から秋へと山が姿を変えてきた様子が窺われるようです。



ドクツルタケ(かなあ?)



こちらのキノコは何でしょう？

秋期特別展が開幕しました

10月4日(土)から秋期特別展「遙かなる古墳時代の海へー紀伊半島と海をめぐる交流ー」が始まりました(船の科学館「海の学びミュージアムサポート」事業の助成を得ました)。

紀伊半島の遺跡を中心にしながらも、西は韓国から九州・瀬戸内・近畿、東は東海・関東(三浦半島・房総半島)までの出土品をあつめて展示しています。中心となるテーマは、モノ(出土遺物)から透けて見える人と技術の交流です。紀伊の出土遺物と各地域のそれとの共通性や個性を検討しながら、海を通して列島の各地域とつながる、いわば海に開かれた紀伊の特質を見てもらおうという



展示です。

海の交流という点では、従来は日本海側の文物の交流が注目されてきました。今回の特別展では、紀伊半島の立地上からも、太平洋側の交流に一定のウエイトを置いています。本来、日本列島をめぐる海上交通・海運の面では、太平洋側にもその機能が存在したはずですが、いままでは日本海側に比べて印象が薄かったような気がします。太平洋側を通じた海運と交流の実態を解き明かしていく取り組みは今後もっと必要になるでしょうし、その中に紀伊の地域がどのように位置づけられるかも大切な課題でしょう。

私は文献史学なので考古学は不案内ですが、古墳時代前期に紀伊半島の南端に下里古墳（那智勝浦町）という前方後円墳が出現するのは、大きさこそ格段に異なりますが、丹後半島の突端に網野銚子山古墳（京丹後市）などの前期の巨大前方後円墳が出現するのに類似した背景をもつ現象ではないかと思っています。

近年の研究動向や成果を語っていただくために、10月12日（日）・19日（日）・11月2日（日）・9日（日）・16日（日）の5回にわたって、それぞれ2人の講師を招いての講演会も実施します（事前申込み受付中）。ご参加をお待ちしております。

行事・イベントもおたのしみください

秋は風土記の丘の事業も多く用意されています。4日（土）には重要文化柳川家住宅を舞台にした「わかふるコンサート」が開催されています。5日（日）はふどきっずの稲刈り。資料館わきの田んぼでは5月に植えた稲が実っています（彼岸花とのコントラストがきれいですね。獣害防止のため周囲をネットで遮蔽しました）。

10月26日（日）には風土記まつりを開催します。来年度からの新博物館の建設や現資料館の改修の期間中の風土記まつりの開催は未定ですが、今年は昨年より多い団体に参加いただける予定になっています。ご来場をお待ちしています。



このほか、はにわづくり・まが玉づくり（10月から11月にかけて4回）、第3回の風土記の丘の植物案内（10月25日（土））もあります。

園路の修理を実施中です

近年、雨水による掘削で園路の損壊が激しくなり、散策する方々にはご迷惑をおかけしています。掘削の激しい箇所を中心に、資料館の職員の手作業で少しずつ補修をしていく計画でおりますので、ご理解をお願いします。